

萩原雄祐博士（1897－1979）

東京大学名誉教授。1946年10月に天文台長に就任、戦後の最も困難な時代に天文台の復興と拡大に尽力する。台長在任中の10年あまりの間に、掩蔽観測による測地事業、報時事業への水晶時計の導入、乗鞍コロナ観測所の設立、太陽電波観測用の口径10mのパラボラアンテナ設置、と次々と日本の天文学の近代化を進め、天文台職員数を4倍に増員した。

1952年ローマで開催された国際天文学連合に戦後最初の日本人として出席、その帰途ヨーロッパ、アメリカの天文台を歴訪し、世界の趨勢は天体物理学の発展にあることを痛感、日本国内に大望遠鏡を建設することを決意する。その後、実現に向けなみなみならぬ努力をする。アメリカ各地の天文台を講義しながら費用を得てまわり、大望遠鏡についての相談をしたり、シャプレーやフォード財団に口径150cm程度の鏡を貰い受けるようにかけあったこともある。計画を進行している最中、御前講義の機会があった。天体の進化について進講したのち、天皇陛下に向かって、“このような研究をするには大望遠鏡が必要である。1億5千万円くらいあればできるのでそれが欲しい”と直訴した*逸話がある。その後、日本学術会議の勧告をとりつけるなどして、台長在任の終わりの頃に実現の運びとなり、岡山天体物理観測所が口径188cm、91cmの望遠鏡とともに設立され、日本でも天体物理学の観測研究ができるようになった。

萩原博士の行政能力が優れていたことは上記からわかるが、それは“行政の技術によってではなく、天文学に対する情熱と日本の天文学の水準を世界の一流にまで持ち上げようとする意欲に支えられたものである”と古在由秀博士（後の東京天文台および国立天文台台長）は記している。

* コラム「萩原雄祐博士の直訴事件」参照

萩原雄祐博士の直訴事件

1953年の正月である。「たまたま新年の講書始めの進講者の一人に私（萩原雄祐博士）が選ばれた。その日は早朝に目がさめた。進講の原稿に望遠鏡のことを書き足した時の私の心境は実に澄みきっていた。昔ならば直訴ははりつけの刑をうける！佐倉宗五郎を思いうかべて、次の時代のために生命を賭ける喜びに震えていた。天体の進化について進講申しあげた後で。こんな研究をするには大望遠鏡が必要である。1億5千万位あればできるのでそれが欲しいと申し上げた。聴講の人たちの間にはざわめきが起っていた。しかし私は総理大臣の吉田（茂）さんが欠席されていたのは返えす返えすも残念であった。吉良を打ち損じた浅野の心境であった。聴講の学者たちは文部大臣の大達さんに、あんなに云っているのだから買ってやれと云ってくれたらしい。別室で御馳走になっていた我々進講者のところへ宮内府長官がきて話してくれた。しかし私は内心穏かではない。直訴は死刑である。私はその足で大学へ行って矢内原総長に私はこうこの悪いことをしたから応分の御処分をといった。矢内原さんは笑って答えない。それから文部省に行って稲田局長にも、こうこのことをしたから大学総長にいて私を処分してくれと話したが、これも笑って答えない。進講をきいていた岡野さんは先生よかったですよと云う。その後は何の音沙汰もなく、次の時代のために生命を投げ出した甲斐があってここに74時の望遠鏡ができあがったのである。」

これは、天文月報第54巻（1961年）に書かれた「直訴事件」の真相である。